令和6年度（2024年度）学校評価総括表　【伊丹市立天王寺川中学校】

教育目標	夢と誇りのある生徒の育成　～自ら学び、考え、行動する力と、豊かな心を育む～
重点目標	① 自ら学び考える主体的な力を育む。② わかった、できたと実感できる授業を展開し、基礎・基本の定着及び活用する力の向上を図る。 ③ 問題行動や不登校生徒の減少に向けた未然防止・早期対応の充実を図る。④ ホームページ、メール配信等を有効に活用し、天中の教育を積極的に発信する。

主要施策	施策目標 基本施策		重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価
学校教育	知・徳・体の調和のとれた児童・生徒の育成	**「確かな学力」の育成** ①授業改善 ②誰一人取り残さない取組 ③学校・家庭・地域の連携	①授業力向上を目指した授業改善の校内研修会を実施する。 ②誰一人取り残さない個別最適な学びを実現する。 ③家庭・地域や校区内のこ幼小中学校と連携し、学力向上、学びに向かう力を推進する。	①全国学力調査、学校評価、授業評価アンケート等をもとにわかりやすい授業を目指す。 ②ICT機器を効果的に活用し、個々に応じたわかる授業づくりに取り組む。 ③校区内のこ幼小や家庭との連携を推進する。地域の協力を得た土曜スクールを行い、基礎基本の定着を図る。また、ホームページや学校便り等を通して、本校の様子を発信する。	①授業は「わかりやすく楽しい」と感じる生徒の割合を75％以上にする。 ②「先生は、教え方に工夫している」と感じる生徒の割合を90％以上にする。 ③校区内のこ幼小の合同研修会を年1回実施する。土曜スクールを年12回実施する。また、ホームページを月10回以上、学校便りや学年便りを月4回以上発行する。	A	①79.9％と目標を達成した。 今後も授業力をさらに向上させていくことが必要である。 ②94.9％と目標を達成した。 ③夏季研修で校区内のこ幼小の合同研修会を年1回実施し、課題等について共有することができた。また、土曜スクールは12回実施することができた。ホームページは月に10回以上の更新、学校便りや学年便りは月に4回以上発行し、積極的な学校情報の発信に努めた。	①引き続き、校内研究等を通して、教師一人ひとりの授業力向上を目指す。 ②引き続き継続してICTの効果的な活用方法を研究していく。 ③①引き続き全ての学年において、積極的な学校情報の発信に努め、地域・家庭との連携を図っていく。	・授業力の向上を目指し授業研究を通して先生方の指導が学力の向上に大きくつながってきていることは大いに評価できる。 ・主体的で深い学びをより深化させるために生徒が課題意識を持って学習に取り組むための手立ての構築を今後も進める必要がある。 ・学力の定着を確認するためCRTなどの客観的データを活用することも学力向上に大いに役立つと考える。 ・googleクラスルームでの発信が保護者にとってあらゆる時間に気軽に読めることができることで、多くの保護者にとってクラス通信などが目にふれやすくなり、大いに役立つことになった。
		新しい時代に対応した教育の推進 ①情報活用能力の育成 ②英語教育の充実 ③デジタル化の促進	①ICT機器を使用した情報活用能力の向上を目指し、積極的にICT機器を活用する。 ②英語教育の充実を図り、グローバル化に活躍できる人材を育成する。 ③デジタル社会を見据えた教育を推進する。	①教職員及び生徒が、ICT機器を使用し、調べた内容を資料にまとめ 、ICTやデジタル教材を活用して、生徒の興味・関心を高め、学びを深める授業づくりに務める。また、主体的に学ぶ場面を増し、個別最適な学びや協同的な学びの質を向上させる。 ②グローバル社会に適用できる英語教育（読む・書く・話す）を充実する。 ③タブレット端末を有効に活用させるために、授業や家庭学習において、AIドリルやデジタル教科書を効果的に活用する。	①85％以上の生徒がICT機器のアプリを使用し、効果的にプレゼンすることができるようにする。 ②CEFRによるA1レベルを全国の平均値以上にする。 ③欠席などの理由で、授業を受けられない生徒の学びを止めないように、授業のライブ配信を必要に応じて行う。また、AIドリルやデジタル教科書を授業や家庭学習で活用する環境を整える。	A	①全国学力・学習状況調査では、85％以上の生徒が「ICT機器を週3日以上、授業で使用している」と回答し、目標を上回った。また、校内のアンケートでは、84.8％の生徒が「iPadでKeynoteやPagesを使用して発表や資料作成ができる」と回答した。使用に関しては一定の水準に到達しているので、今後は効果的な活用に重点を置いていく必要がある。 ②3年でCEFRのA1レベルは131人だった。50％以上の3年生がCEFRのA1レベルに到達することができた。 ③状況に応じて授業のライブ配信を行い、生徒の学習機会を保障することができた。AIドリルやデジタル教科書の活用については利用だけではなく、より効果的に活用できるように改善が必要である。	①個別最適な学びや協働的な学びの質を高めていくための効果的なICTの活用について研究を推進する。 ②さらに授業内での英語教育（読む・書く・話す）を充実させグローバルに活躍できる人材を育成する。 ③AIドリルやデジタル教科書の活用方法について研修などを行い、教員の活用スキルを育成し、生徒がより効果的に活用することができるようにしていく。	・ICTの活用や英語教育の充実が生徒の学びたい意欲につながり、年々向上してきていることは大いに評価できる。 ・ICT機器は、あくまでも指導のための「ツール」だと考える。場面にあったところで適切に活用ができるような授業を期待する。 ・高等学校の授業で新たに「情報」加わったこともありICTを活用することは、ますます必須となってくる。中学校の全教育活動を通してICT教育の推進を期待する。 ・大学の入試でも英検をはじめとしたCEFRのレベルが求められるケースが増加していく傾向にある。特に社会に出て実践的に使用できる英語教育の推進を期待する。
		「豊かな心」の育成 ①道徳教育の推進 ②いじめ等の未然防止、早期発見、早期対応に向けての組織的な取組の推進 ③不登校の児童生徒やその保護者への支援体制の充実 ④体験活動等の実施	①「考える楽しさを創る道徳科授業」及び「心の教育」を推進する。 ②いじめ問題の早期発見・早期対応力の向上に向けて取り組む。 ③不登校を減らす。 ④体験活動等を通して生徒の主体性を育成する。	①道徳のローテーション授業や道徳科授業研究会を行うことで教員の指導力向上を図り、全ての教育活動を通して思いやりの心を育む。また、道徳・人権教育講演会を実施し、外部講師による教育の推進を図っていく。 ②昨年度の取組を継続しつつ、生徒の情報共有を行い、チームとして関わる。 ③一人一人の居場所作りに努め、保護者との関係を築く。 また、必要に応じてSCやSSWなどの関係機関と連携する。 ④達成感や自己有用感を高めるため、生徒自らが意志決定する場面を増やす。	①「自分を大切にすることや、他の人への思いやりについて教えてもらっている」の生徒の割合を80％以上にする（A評価で50％以上にする）。 ②「学校へ行くのが楽しい」という生徒の割合を昨年度以上にする。 ③「先生は生徒の悩み事や不安に親身になって相談にのってくれる」という生徒の割合を90％以上にする。 ④体験活動を学期に一回以上行う。また、「学校行事は楽しい」という生徒の割合を増やす。	B	①「自分を大切にすることや、他の人への思いやりについて教えてもらっている」と回答した生徒の割合が94．2％であり、「よく当てはまる」と回答した生徒が全体の53．9％で目標を上回った。 ②「学校へ行くのが楽しい」という生徒の割合が、昨年度83．3％から83.8％に増加するなど、各項目で肯定的な意見の生徒が増えた。課題として、教師の指導体制や指導方針を整えなければならない。 ③「先生は生徒の悩み事や不安に親身になって相談にのってくれる」という割合が89．2％という結果であった。今後も向上を目指す。 ④「学校行事は楽しい」と答えていた生徒の割合は昨年の90．8％から1．4％向上し、92．2％となった。しかし、生徒の自主的な活動には課題が見られる。	①道徳のローテーション授業の改善や校内道徳研修会を行うことで更なる教員の指導力向上を図り、全ての教育活動を通して思いやりの心を育む。また、道徳・人権教育講演会の継続実施を目指し、外部人材による教育の推進を図っていく。 ②現在の取組を継続し、未然防止に努める。課題解決として、指導内容の共有を図り指導体制や指導方針を整える。 ③教育相談の充実のため、教育相談週間の時間配分や普段の生活において生徒の様子をよく観察したり、ICTを活用するなど今後も生徒としっかりと向き合っていく取組を進める。 ④行事や、日常の学校生活で、生徒主体の取り組みを増やし、生徒の自己肯定感を育む。	・学校が楽しいとアンケートに回答した割合が増加しているのは、先生方の情熱と努力の成果である。 ・いじめや不登校の問題について学校全体で取り組み生徒の自尊感情の醸成に努めていることは大いに評価できる。 ・学校教育の充実は、大きな目標に向けた生徒達の一体感や達成感から生み出すことができる。これは普段の学習とは違った教育現場での貴重な体験であると考える。今後も生徒のアイデアを活かした行事を計画し、生徒の自信につながるような取り組みの推進を期待セル。 ・生徒の自己有用間を高めるために様々なことを体験できる機会を多く持ち「できた」という達成感を自覚できる場を多く取り入れられる教育活動の推進を期待する。 ・先生方のアンテナを高く張ることでいじめを見逃さないという方針がよく伝わってくる。引き続き大切にしてほしい。
		「健やかな体」の育成 ①児童生徒の体力向上の促進 ②魅力ある部活動の推進 ③発達段階に応じた健全な食育の推進	①運動の習慣化を図る。 ②部活動の活性化を図る。 ③生活リズムを整え、規則正しい生活習慣の獲得を図る。	①主体的に体力向上に取り組める生徒を育成する。 ②充実させる内容（目標）を各部活動で持たせ、活動していく。部活動で学んだことが、実生活で役に立つことを実感させる。 ③生徒が自ら、生活リズムについて意識を高めさせる。また、早寝・早起き・朝ごはんについて家庭と連携する。	①体力・運動能力、運動習慣等調査で男女とも全国平均以上にする。 ②「部活動が充実している」と感じる生徒の割合を90％以上にする。 ③規則正しい生活習慣を送っているという生徒の割合を80％以上にする。	A	①体育の授業、運動部活動での活動により、全国平均を上回ることができた。 ②91．7％で、目標数値を上回ることができた。 ③成果としては、達成している学年はあるものの、全体としては79．7％であった。引き続き継続した取り組みを重ねていきたい。	①主体的に運動に取り組む生徒の育成に向け、運動の楽しさを味合わせる授業改善に取り組む。また、運動習慣や生活習慣の大切さを計画的に発信していく。 ②部活動の様子などを確認するために、顧問や担任が生徒とのコミュニケーション大切にし、部活動の実態把握に努める。 ③学校での日常生活において、課題となる生活習慣を見つめ直す機会をつくり、委員会活動を活性化させて改善を図る。	・規則正しい生活は大人になっても難しい。今のうちに習慣を身につけてほしい。 ・部活動ではこれから地域移行することによって運動量の低下やスポーツならではの忍耐力や協調性を養う場が減少するのではないか心配である。 ・部活動の地域移行に伴い学校での体育の授業を通じた運動の機会がこれまで以上に貴重な時間となる生徒が予想される。 ・本年度の取り組みをされに向上させ、天中ならではの体力向上プランを進めていくことに期待する。
		教育相談・支援体制の充実 ①キャリア教育の推進 ②ｽｸｰﾙｶｳﾝｾﾗｰ・ｽｸｰﾙｿｰｼｬﾙﾜｰｶｰの活用 ③教育相談の充実	①主体的な進路選択を支援する。 ②スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーを積極的に活用する。 ③教育相談の充実	①生徒向けの進路学習会（学年集会）を定期的に実施し、生徒自身がもつ進路に対する不安を軽減する。学級担任とのきめ細かい対話を大切にし、保護者向けの進路説明会では、質疑応答の時間を多くとり保護者の不安も軽減できるよう心がける。また、オープンスクール情報をホームページに掲載し、情報の周知をはかる。 ②スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーを積極的に連携する。 ③教師間の情報交換、情報共有を密に行う。生徒が相談しやすい環境をつくる。	①「学校は、進路について情報を保護者に知らせるとともに、適切な進路指導を行っている」の保護者の割合を80％以上を維持し、その中でもよくあてはまるを30％以上にする。 ②スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーを積極的に連携し、不登校生徒の割合を昨年度以下を年間通して達成する。 ③「先生は生徒の悩み事や不安に親身になって相談にのってくれる」という生徒の割合を90％以上にする。	B	①「学校は、進路について情報を保護者に知らせるとともに、適切な進路指導を行っている」の保護者の割合は83．5％であった。その中でもよくあてはまるについては33.3％であった。この数値に満足することなく情報発信を心がける。 ②不登校生徒の割合は、第2・第3学年とも昨年度より増加した。また昨年度と今年度を比較したところ、全校生に対する不登校生徒の割合も増加した。新たな長欠生が出てしまったことは学校として向き合うべき部分である。 ③「先生は生徒の悩み事や不安に親身になって相談にのってくれる」という生徒の割合は89.2％だった。引き続き生徒に寄り添う機会をつくっていく必要がある。	①定例の説明会や学年・学級指導を通じて計画的に進路学習を行う。 ②③不登校生徒を新たに増やさないために、また生徒の悩みや不安にいち早く気付くために、心の健康観察を利用し、教育相談の充実や心の健康観察を利用し、個別支援の充実を図るとともに、生徒理解の研修を実施していく。	・不登校を数字だけで捉えると増加傾向にあるが、学校は不登校傾向の生徒や保護者とのつながりを大切にしながら不登校対策に取り組んでいることは評価できる。 ・学校の教育相談システムを充実させスクールカウンセラーや関係機関との連携を密にした取り組みを今後も期待する。 ・中学校卒業後の進路は近年多種多用途なっている。生徒一人ひとりにあった進路選択に関する情報を積極的に提供することを期待知る。
		特別支援教育の推進 ①伊丹特別支援学校の活性化 ②特別支援教育の充実	①伊丹特別支援学校と連携する。 ②特別支援教育の充実を図る。	①事前に打ち合わせを十分に行い、副籍交流を行う。 ②特別支援教育推進委員会を中心に保護者、教師間との連携を図る。また、教育支援センターである伊丹特別支援学校の機能（コンサルテーション等）を活用する。	①特別支援学校生徒との交流及び共同学習から、相互に理解を深める。 ②特別支援教育推進委員会の体制を整え、一人ひとりの教育的ニーズに応じた教育を充実させる。	B	①今年度は3名の特別支援学校生徒の交流を月1回以上の交流があり、交流学級や特別支援学級、特別支援学校相互の理解を深めることができた。課題としては、交流や共同学習の回数や内容について、十分に協議や検討が必要である。 ②推進委員会を中心に学年会等で教育的ニーズを考え、個別の支援を考えることができた。また、特別支援学校の機能等を参考にし、、生徒支援を行った。今後は通常級で支援の必要な生徒への配慮について対応を考えていく必要がある。	①年度当初に、保護者、特別支援学校担当、コーディネーター等で年間計画を立て交流するようにする。 ②推進委員会を中心に特別支援教育の視点に立ち、どの生徒も持てる力が発揮できるような手立てを考えていく。	・特別支援教育校内委員会を通して支援の必要な生徒に対して合理的な配慮が進められる教育環境の整備を期待する。 ・一人ひとりの教育的ニーズに応じて対応していくのは、困難なことであるが生徒が力を発揮できるような学習の場を提供できるシステムの構築に期待する。 ・特別支援学校との交流はそれぞれのニーズを入念にすりあわせていくことや行事の参加方法などを十分検討することを期待する。
		教職員の資質向上 ①研修等の充実	校内外で研修に努める。	校内外の研修に積極的に参加する。校内研究授業、アップデート研修を実施し、指導力の向上を図る。	校内外の研修に積極的に参加する。 校内研究授業を2回、アップデート研修を積極的に実施し、OJTを活かした指導力向上を図る。	A	校内外の研修に積極的に参加し、指導力向上に努めることができた。また、研究発表会に向けて全職員が「つながり」を意識して授業改善を図った。課題として、計画的にアップデート研修会を進めていくことができなかった。	指導力向上につながるよう、アップデート研修会の充実を図る。	・本年度開催された市内公開研究発表会の成果と課題をふまえて、校内の研修体制を充実し主体的で深い学びが実践できる学習の場の構築を期待する。
教育環境の整備・充実		**学校を支える組織体制の整備** ①コミュニティ・スクールの充実 ②地域と学校の連携・協働体制の構築	①コミュニティ・スクールの充実を図る。 ②地域・保護者との連携を図る。	①学校・家庭・地域の連携・協働体制の一層の充実を図る。 ②PTAの主催行事・地域の行事等に積極的に参加する。	①学校運営協議会を年3回開催し、生徒、保護者、地域の希望に応え信頼される学校運営を行う。 ②「保護者や地域の人とともに積極的に活動している」の教師の割合を75％以上にする。	B	①学校運営協議会を3回以上開催することができた。学校運営協議会で熟考した内容を職員だけでなく、全校集会や生徒会新聞を通して生徒とも共有し、よりよい学校づくりに向けた課題解決に向けた取組を進めた。 ②保護者や地域の方と活動する機会に積極的に活動している教師の割合に関しては、61，4％と目標数値到達することができず、今後の活動の仕方について検討する必要がある。	①共有された情報をもとに、全校生徒が参画できる企画について検討する。 ②地域と関わりのある活動が行われる場合に事前に職員への周知を徹底するとともに地域や保護者と連携して行っている行事について共通理解を図る。	・「天中夢サミット」は他校にはないとてもいい取り組みだと考える。回数を重ねるごとに内容も充実し、意見を出すだけでなく、生徒会での取り組みが継続的に行われていることにより、生徒の主体的な活動であると感じることができた。 ・地域との関わりを深めることで生徒自身も地域の一員であることを実感できると考える。今後も生徒のアイデアを活かしながら生徒が主体的に活動できる場が増えることを期待する。
		安全・安心な教育環境の充実 ①学校園防犯訓練・防災教育の充実 ②子どもの安全対策の推進 ③交通安全対策の推進 ④学校園施設の整備・維持保全 ⑤学校における働き方改革の推進	①防犯訓練・防災教育の充実に努める。 ②安全・安心な教育環境の充実を図る。 ③子どもの交通安全対策の充実を図る。 ④学校施設の整備体制を整え、維持保全に努める。 ⑤働き方改革を、より一層推進させる。	①危機管理マニュアル等を活用し、的確な防災教育を実施する。 ②熱中症対策等の充実を図る。 ③生徒一人ひとりが正しい交通ルールを理解し、交通安全に努める。 ④それぞれの場所において、環境設備を点検する。 ⑤業務改善委員会を行い、働き方改革の充実及び業務においてデジタル化を図る。また、超過勤務時間の削減を推進する。	①防犯や災害が発生した際の対応を身に着けるため、年2回の避難訓練を実施する。 ②体育大会実行委員会内で、未然防止及び初期対応の充実を図る。 ③「学校で交通ルールや安全な学校生活の仕方等を教えてもらっている」の生徒の割合を90％以上にする。 ④それぞれの場所において、月1回破損個所や修理の必要な箇所を点検する。 ⑤業務改善委員会を年3回開催する。また、時間外勤務の月60時間以上の教職員を1割削減する。	B	①防犯や災害が発生した際の対応を身に着けるため、年2回の避難訓練を実施できた。 ②体育大会実行委員会で、熱中症対策について協議し、暑さ指数（WBGT）による対応の徹底や体育大会の練習に係る時数等について話し合い、その後全教職員で共通理解した。その結果、練習から本番までの取組において、比較的スムーズに大会を実施することができた。 ③目標である90％を6.5ポイントも上回ることができた。今後もすべての生徒に身に付けさせることができるよう働きかけることが重要である。 ④普段から使われている箇所については点検・修理が行き届いているが、あまり使用されていない箇所については対応が遅れてしまうことがあった。 ⑤業務の円滑化や棲み分けのために必要な委員会を開催したり、分掌がなるべく重複しないような人員配置が必要である。	①社会状況に対応し、2回の避難訓練の内容に、不審者対応の避難訓練の実施を検討する。 ②今後も教職員の熱中症対策について、共通理解を図りながら行事を推進するとともに、生徒への注意喚起として保健室からの情報発信を中心に、熱中症等の対策を徹底していく。 ③交通安全教室の実施時期等の見直しを行うとともに様々な機会を通して指導していく。 ④清掃分担を見直し、清掃活動の充実を図り、生徒にとって安心・安全な学校づくりを推進していく。 ⑤業務改善につながるさまざまな委員会を学期に1度開催し、年度内でも見直しができるようにする。	・日常生活で生徒が大きな事故や災害に巻き込まれることが想定される。日々の生活の中で指定される安全・防災・防犯教育の推進を期待する。 ・伊丹市は自転車を利用する市民が非常に多い。同時に自転車による交通事故も起こりやすい。生徒が加害者や被害者になってしまうケースをなくすためにも安全教室の充実を望む。 ・職員の働き方改革ときめ細やかな指導は相反すると考える。先生方の負担をなくすためにも本能に必要な業務とスリム化できる業務の見極めを積極的に進めることを期待する。

学校関係者評価総括

・校長先生のリーダーシップのもと学校教育の具現化に向けて、先生方の積極的で且つ生徒に対するきめ細やかな支援に感謝する。
・学校として重点的に取り組んできたことは、ほとんどが数値目標近くに達し、確実に成果も現れている。また、改善点についても細かく振り返り対策もよく考えられている。本年度の自己評価に対して概ね評価する。本年度の成果と課題をふまえて実効性のある改善策を来年度は推進していくことを期待する。
・学校全体の落ち着いた雰囲気が印象的である。先生方がとことんかかわってくれるという生徒の安心感から生まれてくるのかもしれない。本校の取り組みの大きな成果であると考える。
・働き方改革については、教師の仕事は時間で区切るのが困難な面があると思うが、先生方が生徒との時間を大切にしながら、生き生きと活躍できる職場環境になるよう地域も協力していきたいと考える。

次年度に向けた重点的な改善点

〈学力向上〉
主体的・対話的で深い学びの視点に基づく授業改善に取り組む。特に次年度は、ユニバーサルデザインの視点に基づく授業づくりに取り組み、主体的・協働的な学びの日常化を図り、学力の定借を図る。校内研究を充実させ、教職員の授業力を向上させる。
〈生徒指導〉
個を大切にしたきめ細かな対応やコミュニケーションを図り、生徒との信頼関係や人間関係を構築する教育相談を充実させ、生徒指導と一体化させて取り組む。生徒の発達を支え、自ら考え行動できる自己指導力を育成し、未然防止教育に努める。
また、事案が発生した場合は、教職員が連携して組織的に対応し、早期支援や初期対応に注力する。

自己評価の基準　A：目標を上回った　B：目標どおりに達成できた　C：目標をやや下回った　D：目標を大きく下回った